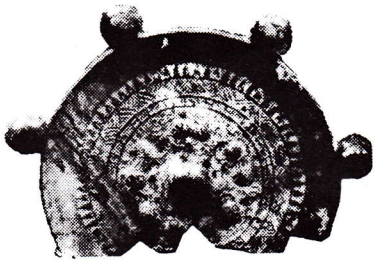
第 31 号　　平成18年6月1日

文化財やまと

大和町文化財保護協会発行



七鈴五獣鏡

地元から再出発しよう

―文化財展示館を拠点にして―

会長　佐藤光一

暖冬の予報に、過ごしやすさを期待していたのに、十二月に入ると直ぐ連日の大雪に見舞われ、雪との格闘が続いた。

その雪がようやく止むと、ほっとする間もなく、あちこちから雪害の情報が寄せられた。町内の指定天然記念物の中でも、特にサクラ・ケヤキの被害が多かったが、その他に領家のモミジ、細川家のヒイラギ等も被害を受けた。

三月にはいると、関係の方々のお骨折りで、雪害の後始末が行われたが、明建神社のサクラ並木と円光寺のシダレザクラについては、教委文化財室のお骨折りで、折れた枝処理と、防腐処置が行われた。

四月二十三日にこの両者を撮影をしたが、傷跡が痛々しいながらも健気に花を咲かせている姿は頼もしく思えた。

一方白雲山観音堂では、平成十二年に着工された「生活環境保全林整備事業」が完成し、四月二十九日の観音堂祭りに合わせて「白雲山やすらぎの森」開園記念式典が挙行された。

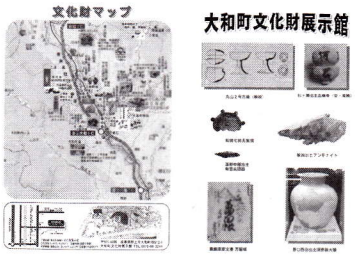
『生活環境保全林「白雲山やすらぎの森」として整備された当地は、白雲山観音堂遺跡や三十三観音など古くから地域の人たちに親しまれてきたところです。この自然と歴史ある当地を、山地防災機能や水源涵養機能などの他面的な機能を高度に発揮させるとともに、誰もが気軽に観察や森林浴などが出来るよう遊歩道や休憩施設などの整備も行われました。……「白雲山やすらぎの森」は地元住民はもとより遠来の人々にも森林レクレーション、保険保養の場として多目的な利用を期待して整備されております。』（郡上市の公式文書から）私たちもフィールドミュージアムと共に、活動を通して、この素晴らしい場所を世に知らしめたいと思う。

さて、開館以来二年半になろうとしている大和町文化財展示館であるが、ようやく展示物の概要を紹介するパンフレットを作ることが出来た。まだ他にしなければならないことが山積しているが、今年度は事業部を中心に、この施設を拠点として研修を深め、施設のさらなる充実と共に、会員を結集して、先人の遺したものを悉に辿りながら、郷土の文化財への理解と保護に努めたい。

明建神社の桜並木

円光寺のシダレザクラ

白雲山やすらぎの森」記念碑除幕



パンフレット表紙見開き

「文化財やまと」より抜出

山内一豊の妻千代
見性院七首の道歌

仏道悟りの歌

高橋義一

▲見性院の出自　山内一豊の妻千代の、父は美濃国郡上八幡城遠藤盛数。母は同国山田庄篠脇城十一代東常慶女。（九代東常隆、十代元胤跡が常慶）

千代は兄慶隆を含む五人の兄妹の末妹である。と『大和村史通史編上巻』（昭和五九年刊）に発表された。

これは、高知女子大学故丸山和雄名誉教授と長年にわたる共同研究により解明し、故山内豊秋様により承認された（豊秋様は十代・最後の殿様）。

すなわち、山内家系図中「一豊の妻は若宮喜助友興が女」を訂正されたのである（同系図は、幕府へ提出した「寛政重修諸家譜」に）。

見性院肖像画（山内宝物資料館所蔵）

▲永禄五年九月、父盛数急死（一五六二）　その年、千代誕生。跡継ぎの兄慶隆は十三歳。寡婦友順尼は美貌ゆえ、早速、関城長井隼人正やもめから求婚された。彼は、美濃国守稲葉城斎藤龍興の重臣であった。

幼君を抱えた遠藤家は、老臣たちが御家の重大事として、拒む友順尼を説得して、長井隼人に再婚させた。

▲永禄十年、信長により稲葉城陥落　直ちに、隼人は将軍足利義昭の許へ逃げた。慶隆は信長に降参して郡上領を安堵され、八幡城へ帰った。

再婚の付人埴生太郎左衛門は、友順尼・六歳の千代らを連れて、郡上苅安戸谷庵（後の乗性寺）へ避難した。たまたま、信長に反抗して追われ、郡上に隠棲し、布教を続けていた本願寺教如上人に出会い、初めて「友順尼」の法号を授け、盛数や先祖東常縁・元胤らを供養した（乗性寺御朝堂には東胤行以来を祀る）。

千代は、母友順尼から、曽祖らの「古今（和歌集）伝授」の関係古典を学んだ。そして、苅安西方の高賀山・瓢ケ岳・南岳等に修行する山伏修験者の道場粥川寺・星ノ宮等にも参り、本尊虚空蔵菩薩や諸仏を拝し、同行の太郎左衛門と共に、山伏から武術を習ったとみられる（実事千代の側は夫一豊に勝ったという）。むろん、父盛数の近習だった太郎左衛門から、乗馬を教えられたに違いない。

▲千代と一豊の結婚　一豊は信長の家臣秀吉に従って、乱世平定の戦陣に明け暮れた。そして、天正五年（一五七七）の暮、秀吉は、播州攻略を信長に報告のため岐阜城へ帰った。その時、一豊（三十二歳）は随行し、直ちに、苅安の友順尼の女千代（十八歳）と見合し、翌年正月結婚した。

秀吉の事だから、知らせだけでは済まさず、北方（現、大垣市）の式場にのぞいたろう。と言うのは、一豊の姉通（北方殿と通称）は、北方城主安東守就（東常縁の兄氏世の後裔）の弟郷氏と早くに結婚し、遠藤盛数夫妻と親交し、美しい千代にも眼を留め、一豊の婚期の遅れを案じ、秀吉に許えていたため、秀吉が一豊を連れて来たわけである。

通の母法秀院は大垣の稲葉一鉄下の牧寸政倫に養われていたが、通の秀吉への積極的な訴えが功を奏したとみなす。

—これ以外に一豊・千代の結婚好機は見出せない。

▼・・・▲

▲慶長五年関ヶ原の合戦（一六〇〇）は、一豊千代一番の功名により、家康が天下を握る機運を生み、一豊は掛川六万石から、土佐二十四万石の国守に栄転した。

慶長十年、一豊は土佐城で急死。六十二歳。一豊の叔父真如寺の在川謙作和尚が、掛川から急船で乗り着け、火葬に付し、千代は法号見性院を授けた。

実は、一豊千代が秀吉の長浜城を拝領したが、天正十三年（一五八五）十一月の大地震で六歳の与祢姫が惨死し、京都妙心寺大通院に弔っていた。従って、翌年、見性院千代は、一豊の遺骨を持参し、大通院の与祢の墓所へ納めて、共に弔った。

▼・・・▲

▲在川和尚に披露した見性院七首の道歌を、南化国師（ママ）が見て感じ入り、早速、道号を授けますと、賛嘆した（山内家宝物資料館蔵）。

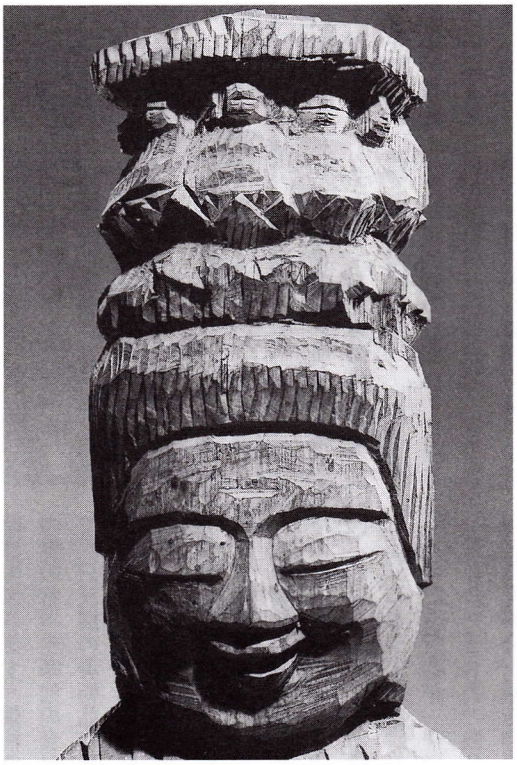
仮名が多いので、適当に直し

て、解釈を施した。

則の心ほとけをたづぬれば、
無念無想の所にぞある
心中の迷いのままに（則の心）仏法の真実をたずねたら、無念無想という所にある事を知りました。

三界もただ一心ときく時は、
地獄は人の心にぞある
三界（欲界〈色欲＝物質欲・食欲の世界〉、色界〈欲界を離れた物質的存在の世界〉、無色界〈色界も離れた受・想・行・誠の観念的世界〉）も、ただ一つで、二つと無いと聴いた時、地獄というのは、人の心の中だけにある事を知りました。

ちちははの無まれぬさきはしらぬ也、しらぬ所をこくうとぞしる
人の先祖の無かった前は知りませぬ。知らぬ所を、万物一切を包容する虚空だと知りました。


虚空蔵菩薩（149.6cm）
（「円空の原像」所収）高賀神社蔵

釈迦弥勒縫ひそとみれば現在
は、ただ水面のうちにある物
釈迦と弥勒は、縫糸（縫苧）のように長く永遠にお救い下さるとみた時、現在の私どもは、ほんのわずかな水面に、一瞬、生かされている物にすぎない事を知りました。

色相の客意を切って無が一、四衆成道より虚空にぞゆく
「色相の客意」という現世の旅心を絶ち切って、私ども四衆（仏門の四種の弟子、比丘・比丘尼・男の仏教信者・女の仏教信者）は、仏道の悟りを得た時、絶対無の世界（無が一）、虚空蔵菩薩の所へ往く事を知りました。

悟り得て迷の雲のはれぬれば、
心よの月をみるぞうれしき
悟りを得て迷いの雲が晴れたので、心から、美しい月を観る事が出来て、ほんとうに嬉しい。

――……――

御うたいづれも
いづれも奇特に候、
此上は釈迦
弥勒一体
にて候、やがてやがて
道号書き
候て、まいらせ候、以上
御歌はいずれもみな優れています。これ以上の道は、釈迦弥勒一体永遠の世界でございます。早々に、道号（仏道を修得した僧侶の妙号）を書いて、差し上げます。以上。

――見性院の道歌に圧倒され、「これ以上の道は釈迦弥勒の道」と、彼女の歌に重複するような讃詞。

▲千代、高賀山虚空蔵信仰

高賀山は苅安西方から板取（現美濃市）に跨がって、実に険阻な山。修験者は、山中駆け巡り、洞窟等に幾日も座禅、修行した。

岳の主尊は、白山信仰へも連なった虚空蔵菩薩であった。

円空（一六三二―一九五）も粥川寺で得度し、入山修行した（星宮蔵、円空長句）。そして後年、板取の高賀神社に、誠に柔和な笑顔の、虚空蔵菩薩一体を遺した。なお、円空は北海道から四国辺まで巡錫し、生涯に一万体ほどの「円空仏」を刻み、最後に、関弥勒寺住職に迎えられた（池田勇次編集・美並村『円空の原像』）。関市の弥勒寺は、古代武儀郡衙役所が祭祀した寺院であった。

千代は、一豊と結婚するまで、母友順尼の許で、東家の歌道を学び、朝夕高賀三山を遙拝し、また、山麓の社寺にも詣って、諸仏に接していたから、見性院となって仏道を悟った時、深淵な悟りの世界を歌にする事が出来た。

道歌七首のうち、二首も絶対無の世界「虚空」を歌った。見性院千代は、やはり、稀にみるすばらしい女性であった。元和三年死去（一六一七）。六十二歳（一豊と同年齢）。

なお見性院は、土佐の二代忠義に、形見として、「古今集」、「徒然草」等を遺わした。

古今集は、五代豊房が襲封の時、将軍綱吉母桂昌院へ「東下野守常縁筆本」を、同御台所へ「冷泉為秀本」を、夫々献上した（徳川実記）。

また、「徒然草」の著者吉田兼好（一三八三頃）は、藤原二条為世の四天王の第一。当然、二条派の「古今伝授」を施行した東常縁座右の「徒然草」が、見性院に伝世され、大切に、また彼女の座右本になったものとみられる。――同本は、戦前中等学校の国語副読本にも使われた。

（五月五日）

憧れの三渓園と桜満開の鎌倉

本川　喜代士

「日本には、こんなに沢山の、美術館が有るんだ！」

数年前のある契機を境に、私は美術館を作った人々、美術コレクターの種々層に興味を感じ、これらの書物を読みあさった時期があります。松方幸次郎、益田孝、大原孫三郎父子等が有名ですが、原富太郎は、その人間の大きさに於いて他の人を抜きんでていた様に思います。

大和町文化財保護協会が出来たのがこの頃かと思うのですが、1973年より数年間、「芸術新潮」に田中日佐夫氏による戦後美術品移動史が連載され、74年の1月号に掛けて5回に渉り、原三渓（富太郎の通称）の偉業が詳しく載っております。

この人の蒐集の偉大なのは、国宝級の古い建築にまで及んで居り、廃仏毀釈の影響による美術品、仏像等の海外流出を防ぎながら、三重の塔の移築まで実現した事でしょう。

更に、芸術のパトロンと呼ぶに相応しい若い画家達、安田靫彦、小林古径、前田青邨等を育て上げ、大観、観山達にも支援を惜しまず、濃尾地震、関東大震災の際には、被災者の多くを助けております。栄枯盛衰は人の世の常、生糸業の衰退によって、三渓園の美術品は殆ど無くなりましたが、庭園と建物だけは後の人の努力によって立派に残され、戦後になって矢篦原（矢野原）家住宅は白川郷から移された一番新しい建物らしい。でも渋草焼や春慶塗等の古物展示品、欄間や二階への階段も凝った造りになっていて、じっくり見ていたら、私が一番最後になってしまいました。残り時間を気にしながら、息を切らせて階段を上り、只一人で三渓園の象徴である旧燈明寺の三重塔を目の前にした時が、最高の至福のひと時でした。残念ながら今回は天候に恵まれず、心おきない見学は出来ませんでしたが、新緑の蕗の葉に、淡いピンクの可憐な桜の花びらが幾つも張り付いた光景は、瞼の奥に、静かな想い出を与えられた感じでした。

旧矢野原邸

初日にはもう一つの楽しみが待って居りました。高額な旅館の多い鎌倉で何処に泊まるのかなと思っていたら江の島でした。ここへは何度か行きましたが宿泊は初めてでした。老舗旅館「岩本楼」、驚いたことに入浴しようとしたら「待った」がかかりました。少々待ってもらちが明かないので、見に行ってみたら、ただ脱衣所が混んでいるだけでした。旅館お奨めの洞窟風呂、中は意外に細長く、一番奥は階段の上に小さな魚のいる水槽が、階段を塞ぐ形で置かれて居りました。「これ火事になったらどうやって逃げるんだろう？」渡辺さんが冗談に言った事が、本当になってしまいました？　翌朝、珍しく早く起きた私は、洞窟風呂に一人だけでのんびり入浴を済ませ、ロビーで朝刊を読んでいたら、突然、火災報知器が作動、驚いたのは支配人でした。以下の状況は省略しますが、結局は誤作動だった模様で、ホット一息でした。　岩本楼最大の自慢は、もう一つのローマ風呂で、1930年代に造られたこの設備は、国の登録文化財に指定され全国に幾つもないお風呂らしく、飾りものの蛇口だとか、ドーム形天井のステンドグラスだとか、名タイル職人のテラコッタなど、文化財に指定されると、火災警報は厳しいのか、早朝、一人しかいなかった支配人は、連絡に大わらわでした。

旧燈明寺三重塔

文化財のお風呂なんて初めてと言ったガイドさんが一番輝いたのはこの日の朝でした。

来る時は、鎌倉のDVD放映で殆ど無口だったガイドさんも、江ノ島、七里ヶ浜、稲村ヶ崎を前にしては「真白き富士の嶺」そして小学唱歌「鎌倉」の合唱と、岐阜県の花だというレ

段かずらの桜

ンゲの漢字テストと急に元気になり、成績が良かったのは一番後ろの席でした。

鎌倉の観光は、車も人も混んでいるので、歩いて見物するのがベターとされております。それをバスで廻るのですから時間がかかります。先ずはサーフィン見物、上手く波に乗るのは仲々大変なようでした。由比ヶ浜から若宮大路に入り、鶴岡八幡宮の鳥居の前でのUターンして段葛の両サイドからの桜見物という、贅沢な花見から鎌倉見学は始まりました。

一番最初は、鎌倉南の端の材木座、光明寺。いきなり幼稚園児の行列に出逢いました。

大きな山門をくぐる黄色い帽子の園児の行列越しに見えた満開の桜は素敵な風景でした。

本堂に向かって左側に小堀遠州作という大賀蓮で知られる蓮池はまだ少し淋しく、右側に竜安寺の石庭風の三尊五祖の庭、道一つ隔てた向こう側が、園児達の材木座幼稚園でした。石庭の真っ白い土塀の外側に、旧い墓石が整然と並んでおりました。

時間が早かったせいか、駐車場がまだ空いていて鶴岡八幡宮はゆっくり回れました。

源氏の勢力争いで有名な大銀杏までがガイドさん名調子の世界、「静や静……」で知られる舞殿は工事中で大きなシートで覆われ、ガイドさんを残念がらせて居りました。傍らで奉納の沢山の酒樽群を横目に、写生中の人が目に入りました。他の場所でもスケッチしている人と、外国の観光客の多いのが目に付き、流石が日本の鎌倉だと思い知らされました。時間が少しあったので精力的に歩き回りましたが、私は段葛の手前の大鳥居まで、その先まで足を延ばした方が多かった様です。帰り、生後一ヶ月程の可愛い赤ちゃんを抱いたお礼参り風のご家族が、大銀杏の階段を元気に登っていくのが微笑ましく思われました。

光明寺山門と境内のサクラ

円覚寺はJRの線路をまたいでの参拝でした。漱石、藤村、有島武郎等文士ゆかりの寺で田中絹代、佐田啓二、小津安二郎のお墓、石仏や塔頭も多く、時間が許せばとの思いが多い所で、150段近くの急な階段を登って、国宝の洪鐘を見た人は何人いたのでしょう。

建長寺仏殿

鎌倉五山の第2位は円覚寺、第1位は建長寺で、総門の奥の桜は満開、記念撮影の場所が多く歩くのに気を使いました。堂々たる三門の先に樹齢750年の柏槇（ビャクシン）の巨樹は見事なもので、カメラの画面に入れるのが大変でした。

長谷寺の「十一面観音」は日本で2番目の大きさ（9・18m）で、正に金色の崇高な顔立ちはそれだけで圧倒される感じでした。観音堂の前の「見晴らし舞台」の眺望は、遠景の大島までは見えませんでしたが、ここでもお地蔵さん等の石仏や石碑、花や山野草の種類も多く、見所はきりがない感じでした。

円覚寺山門

昼食の味亭はお土産屋さんの二階、気が付いたら、窓の外に大仏さんの顔が覗いて居りましたが、やはり見下ろすよりも、大仏さんの正面のなるべく遠方から桜越しに拝顔するのが一番美しいお姿でした。ここから六地蔵へ向かう道が文士の道漫歩コース、いわゆる鎌倉銀座、人も車も終日渋滞の様子、こんなに流行る商店街は日本でも珍しいでしょう。

今の一番の人気は紫芋のソフトアイスとか、若い女性のグループ、子供を肩車した外国人家族に交じって、元気な熟年女性の二人連れで通り過ぎた話が何時までも耳に残りました。「ねえ辺鄙な田舎にいるよりも、こういう活気のある処に、終の棲家を探すのが、一番の生き甲斐じゃないかしら？」

鎌倉大仏を最後にバスは帰路に就きました。今回の旅行は応募者が多く、45名の定員を締め

切るのに苦労し、結局は48名、補助椅子は使いませんでしたが、一番後ろは5人座り、ちょときつかったと思うのですが、不満は冗談に紛らわして話に一生懸命でした。専ら車での苦労話が中心、先ずカーナビで指示する曲がり角を間違えて一つ早く曲がってしまったらどう教えてくれるのか、から始まりましたが、話に夢中でいつ渋滞を通り越し、いつ東名に入ったのかさえ分からなかった程です。渡辺さんが北陸のある駐車場で車のキーを紛失した話、夜遅く警察に連絡してメーカーや取次店を調べ、パトカーを乗り回した様ですが、何分にも夜中だったので大変だったらしい。その次には山田さんの13台の事故に巻き込まれた話が出てきました。ある集まりの帰りで、13台の真ん中に入ってしまったけれど、追突されただけで自分はぶつけなかったので、却って良い思いをしたとか。話が上手なのと実際に経験された事を喋るのでつい引き込まれ、近くの席の何人かはニヤニヤしながら黙って聞き耳を立てて居りました。私などは後ろに気を取られてハマちゃんの釣り馬鹿日誌など、上の空でした。極めつけは、渡辺さん同乗車のガス欠の話。場所はせせらぎ通り、有料のトンネルが出来る以前の若かりし頃、夜間、坂本峠を越える際にガス欠を起こしてしまいました。この苦境を難なく乗り越えて来るのです。「どうやって?」それは私が述べるよりもご本人から直に話を聞かれた方が良いでしょう。豊かな人生経験と的確な判断力、対処の方法に頭が下がりました。改めて渡辺さんを見直させられました。

長谷寺の「十一面観音」

次いでと言っては失礼ですが、二人の人に感謝しておきたい。先ず滝日準一さん、新潟、能登、鎌倉とここ3年見事な桜を見させて貰って居ります。旅行日の設定にどれ程、気を配って居られる事か、今年はDVDも購入、バスもそれに併せたものに決められました。もうおひとかたは、元旅行屋の山本茂さん、今回も見えないので準一さんに聞いたら、もう「卒業」されたと言うことでした。いつも大きな薄っぺらのカバンを持ち、色々心配りをされたあの姿にはもう会えません。4年前の宮島まで足を延ばした時、新入りの私達にまでさりげなく気遣いをされ、優しく声を掛けてくれた事がいつまでも忘れられません。お礼を言わなければいけない方は、まだ次々現れるでしょう。毎度の事ながら、文化財の旅行は、今年も、来年も、感謝、感激の旅となる筈です。

さて帰りのバスは夕食の補給を入れて3回サービス・エリアに止まりました。その一番最初の足柄で私のドラマが待って居りました。我々のバスは岐阜バスの目立った真っ赤な車体ですが、その周りに白い車体に桜のマークを散らした日本交通の5台のバスが止まっていたのに気付いた人は余りいなかったと思います。中に乗っていたのは、制服仕立ての黒い背広で揃えた新入生風の若き青年達、胸の名札を見たら「NTT東日本」の文字が読みとれました。私は嬉しくなってつい声を掛けてしまいました。「私は10年前君たちの会社を定年退職したんだよ」「ワー、大先輩なんですね」聞いたら、入社研修で関西方面へ移動中とか。朝、桜の中で幼稚園児に出会い、夕方、若き後輩達と話せるなんて、思ってもいない出来事でした。所が話はそれだけでは済みませんでした。私共が大和の住人になるに付き、大変お世話になった親類が八幡に居られるのですが、その方のご子息が二浪の末今年NTTに入社されたと言うのです。日交の5台のバスのどれかにその子が乗っていた筈、「サクラサク」はひと頃合格通知の定番でしたが、何となく嬉しい気分となれる今回の旅行でした。

記念写真

帰った翌朝、17年豪雪で春遅い大和町の我が家で、初鳴きの鶯の声が聞かれました。

大和町牧粟飯原家蔵

「万留帳（よろずとめちょう）」の魅力

佐藤光一

万留帳は全一二冊から成っている。各冊美濃紙二つ折り五〇枚綴り（ただし第三冊は五五枚）で、文政九年（一八二二）正月三日から死の直前の慶応二年（一八六六）一〇月末までの四〇年間にわたる日記体の記録である。

筆者は、かつて篠脇城主東氏の氏神であった妙見神社（現明建神社）の神主粟飯原豊後正（あいはらぶんごのかみ）で、はじめは武蔵といい、のち武造と改め、最後は常流（つねはる）と名乗った。文政九年二一歳で父に死別して家督を相続し神職を継いだ。

筆者が神主を勤めた四〇年間は、日本が明治維新という歴史上の大きな転換期を目前にして苦悩している時代である。それは美濃の奥地郡上といえども例外ではなかった。そうした時代の流動する姿がこの万留帳に、しっかりと書き留められているので、われわれはそこに大きな歴史の足音を聞く思いをするのである。ここに本書の最大の特色があると思う。その主なものを挙げると、まず全国的に襲った天保の大飢饉を始めとして、郡上藩の趣法講の失敗、米札発行とインフレの進行、それに反発した農民騒動など、藩政府をゆさぶるような諸問題や、さらに全国的な米価の暴騰、大坂における大塩平八郎の反乱、異国船の渡来、桜田門の変、和宮の降嫁など歴史上に有名な事件が、単なるニュースではなく、みな自分たちの生活に少なからず影響を与える現実問題であることを筆者は指摘している。しかも其態度は客観的実証的であって、資料としての価値が高い。

私たちが町民大学で万留帳を読み始めてから今年で四年目を迎えた。

この間、第九番、第一番、第二番を読み、今年度は第三番を読んでいる。

その中で感じるままに以下少し述べてみようと思う。

天保八年（一八三七）二月一九日におこった大塩の乱について次のように述べている。

一二月一九日大坂表大塩何某（平八郎事）それぞれの企てにより焼亡におよび申し候。前後種々色々大へんなる話これあり候得ども、一切定かに相知れ申さず候。但し三月十六日、右企ての人々逃げ候者御尋の人相書き御上様より御触れ遊ばされ候間、左に略して留め置く。

一当二月十九日容易ならざる企てにおよび、大坂市中所々放火いたし、乱暴に及び候元大坂町奉行所組与力大塩平八郎並びに組与力大塩格之助、同瀬田済之助、同組同心渡辺良左衛門、同近藤鍋五朗悴近藤梶五朗等人相書き

一年齢四十五・六歳計り

大塩平八郎、相体これを略す、其節着用鍬形付き甲、着用黒き陣羽織、その余着用分からず。（以下略）

事情が分かると、直ぐさま三上藩主遠藤但馬守に見舞い状を出している。

一二月十九日大塩平八郎等企てによりて大坂大火仕り、右のお見舞い　遠藤但馬守様差し上げ候書状左の通り

一筆啓上仕り候、先ず以って各様益々御安全御勤め遊ばされ珍重の御儀に存じ奉り候、然らば去月十九日大坂市中夥しく焼失致し候由、様子承り候ところ、御城内並びに御下屋敷に於いては御別状これ有らせられず候由、御満足の御事と存じ奉り候。併しながらこの度の火災容易ならざる御儀と承り候得ば、定めて殿様始め奉り御一家中御心配これありなされ候哉と案じ奉り候。右御機嫌伺い奉りたく、愚札を以って斯くの如くに御座候、恐々謹言

三月十日　粟飯原武蔵常流（花押）

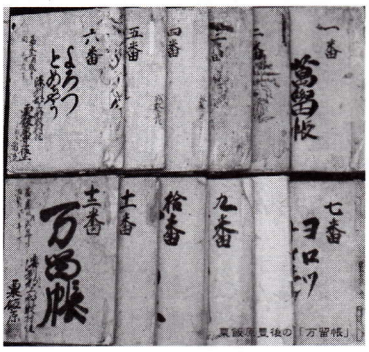
松井与七郎様

粥川小十郎様

猶この段を以って御機嫌伺い奉りたく存じ奉り候。御序での刻御前宜しくお取り成し仰せ上げられ下さるべく候。以上。

右の通り両人連名にて大坂在勤水谷亦七郎へ御頼み申し、差し遣わし申し候。

紙面の都合でここで筆を擱くが、万留帳には私たちが日本史で勉強した事柄が、身近に感じられ、限りない魅力を感じる。



「万留帳全十二巻」

平成17年度　事業報告

5月14日(土)　執行部会（年間事業計画等について）
執行部会、役員会提出議題について
「文化財やまと」編集委員会
原稿依頼について
5月19日(木)　第1回郡上市文化財保護協議会理事会
監査会、役員会
30日(月)　平成16年度会務・決算報告について、平成17年度事業計画・予算案について、平成17年度総会について、会費徴収について
6月17日(金)　平成17年度総会
会報「文化財やまと」発刊（発行部数４００部）
7月1日(金)　執行部
10日(日)　郡上市文化財保護協議会　文化財めぐり（於、白鳥町、参加者39名）
19日(火)　第2回役員会
31日(日)　東氏館跡庭園池泉清掃・阿千葉城跡清掃（参加者38名）
8月7日(日)　七日祭・薪能
10月5日(水)～6日(木)　郡上市文化財保護協議会「秋の文化財探訪」（本会より3名参加）
8日(土)　研修部会（秋の日帰り研修について）
11日(火)　執行部会
18日(火)　第3回役員会（秋季日帰り研修・文化財収蔵展示館等について）
24日(月)　秋季日帰り研修（参加者42名）
12月5日(月)　執行部会
16日(金)　第4回役員会、事業・会計中間報告、懇親会その他
1月28日(土)　研修部会（平成17年度1泊研修計画）
2月9日(木)　役員会（平成17年度1泊研修に付いて、その他）
○期　日　平成18年4月5(水)～6日(木)
○目的地（第1日）横浜「三渓園（矢の原蓮原邸を中心に」、（第二日）
鎌倉（円覚寺、建長寺、鶴岡八幡宮、光明寺、長谷寺、高徳院・大仏）
○募集人員、最大49名
4月5日(水)～6日(木)　平成17年度1泊研修（参加者48名）

平成18年度　事業計画

4月20日(木)　執行部会（年間事業計画等について）
執行部会、役員会提出議題について
「文化財やまと」編集委員会、原稿依頼について
5月13日(土)　第1回役員会　監査会、
平成17年度会務・決算報告について、平成18年度事業計画・予算案について、平成17年度総会について、会費徴収について、
会員拡大について、
15日(月)　第1回郡上市文化財保護協議会理事会（役員改選、その他）
19日(金)　県文化財保護協会理事会
19日(金)　郡上市文化財保護協議会理事会
6月12日(月)　平成18年度総会
会報「文化財やまと」発刊（発行部数４００部）
29日(木)　執行部会
7月10日(月)　第2回役員会
19日(水)　郡上市文化財保護協議会　文化財めぐり（於、大和町）
30日(日)　東氏館跡庭園池泉清掃・阿千葉城跡清掃
8月7日(月)　七日祭・薪能
9月20日(水)　研修部会（秋の日帰り研修について）
10月11日(水)　執行部会
18日(水)　第3回役員会（秋季日帰り研修、その他）
期日未定　秋季日帰り研修
12月5日(火)　執行部会
16日(土)　第4回役員会、事業・会計中間報告、懇親会その他
1月29日(月)　研修部会（平成19年度1泊研修計画）
2月9日(金)　役員会（平成19年度1泊研修に付いて、役員改選、その他）

◎春季1泊研修は新年度の実施の行事とする。

以下期日未定
文化財研修（フィールドミュージアム《文化財展示室を中心に》）郡上市文化財保護協議会「秋の文化財探訪」（以上のほか、本会の活動に合致した展覧会・発表会等には、協議の上、できるだけ参加する。）

平成18年　4月末現在

会員名簿（順不同）

■剣

山下運平（顧問）　八八－二四〇六
籏　勝美（顧問）　八八－二〇三一
村瀬喜八　八八－二一二八
河合俊次（理事）　八八－二二四六
小池久江（理事）　八八－二五七六
山下ふみえ　八八－三二二七
加藤正恵　八八－二一一〇七
高橋　明　八八－二四八八
加藤文蔵　八八－二八〇二
佐藤光一（会長）　八八－三二〇一
佐藤八重子　八八－三二〇一
田中和久　八八－二二〇〇
高橋義一（副会長）　八八－三七九二
高橋叙子　八八－三七九二
河合　恒　八八－二三五八
河合　尚　八八－二三〇四
加藤小弐　八八－二三二九
森前とし子（理事）　八八－三四七九
新蔵　守　八八－二三七五
岩崎扶美子　八八－三五二一
河合利雄（理事）　八八－三五二〇
河合美弥子　八八－三五二〇
山内　博　八八－三八八六
山内悦子　八八－三八八六
河合善吉　八八－二一〇三
小池祐二　八八－四〇六四
小池圭子　八八－四〇六四
林　千里　八八－三三三三
佐藤公子　八八－二一六一
山下妙子　八八－二四〇五
山田ひとみ　八八－二七三六
日置節子　八八－三四〇二

■大間見

村井正蔵　八八－二三二三
大野一道（理事）　八八－二二三〇
大野紀子　八八－二二三〇
野田英志　八八－二二八五
清水一作　八八－三〇八六
池田充彦（理事）　八八－三〇九〇
小野江　勉　八八－二七二五
松井賢雄（理事）　八八－三九九一
藤代順行　八八－三〇六〇
玉木吉郎　八八－三四一五
小野木花子　八八－二七四七
青木ユリ子　八八－三四七七
日置敏明　八八－三一〇五

■小間見

田代善一（理事）　八八－三九六五

■万　場

八八－二四四一
石神尭生　八八－二四一三
稲葉和巳　八八－二五〇三
筧　伸雄　八八－二五三二
筧　明代　八八－二五三二
三島秋男　八八－二四六一
桑田和子　八八－二四一九
桑田渥見　八八－二四四六
黒岩弘美　八八－二四五八
井俣赫美　八八－二七五八
井俣初枝　八八－二七五八
青地正男（理事）　八八－二四四七
大井静子　八八－二三三八
大井正明（書記）　八八－二八九四
大井次子　八八－二八九四
井上妙子　八八－三五〇八
沢原　勝　八八－三一五〇
沢原美幸　八八－三一五〇
山田武司　八八－二四七五
山田和美　八八－三六三一
籏　清子（理事）　八八－四一七〇
山田敬子　八八－三九一七
大井ともゑ　八八－二八九三
三輪孝子　八八－二七八二
桑田守夫　八八－二五一四
大中弘美　八八－三五〇六
大中春子　八八－三五〇六
鷲見　務　八八－二六五一
鷲見三津子　八八－二六五一

■徳　永

鷲見おと　八八－二一八九
矢野原幸子（理事）　八八－二〇七七
水野志づ子　八八－二六一〇
山内孝一（理事）　八八－二六一六
土松新逸（名誉会長）　八八－二七三一
遠藤賢逸　八八－二一二二
遠藤冨貴子（理事）　八八－二一二一
木島三郎　八八－三五九〇
矢野原吉夫　八八－二一三九
村瀬弥一　八八－二六〇二

■河　辺

清水幸江　八八－二〇一九
清水美佐子　八八－二〇二一
前田　孝（理事）　八八－二一〇一
岩谷千代子　八八－二一一一
尾藤　清　八八－二一四七
尾藤元子（理事）　八八－二一四七
岩谷敏子　八八－二〇六三

■神　路

森　忠敬　八八－二〇八三
臼田宝徳　八八－三七三〇
羽生　清　八八－二二七一
山田眞人（会計）　八八－二一一四
山田正代　八八－二一一四
山田　健　八八－二六八九

■牧

金子政子　八八－三四二六
滝日準一（理事）　八八－二七〇五
滝日美代子　八八－二七〇五
粟飯原常人　八八－二三六二
日置貞一　八八－二六六二
土松貞二　八八－三九八〇
日置　昇　八八－三六三六
遠藤千津子　八八－三六三七
遠藤光平　八八－三九八一
遠藤周一　八八－二八九〇
滝日義一（理事）　八八－三〇六二
滝日和子　八八－三〇六二
滝日　治　八八－三四〇六
滝日敬子　八八－三四〇六
田口勇治（監事）　八八－三九五〇
加藤一男　八八－二八七〇
日置元衛　八八－三四一七
本田欽一（理事）　八八－三一六〇
野田嘉明　八八－三〇四三
尾藤佐紀子　八八－二三五三
遠藤甲子男　八八－三九三五
早瀬ふみ子　八八－三三二七
日置康夫　八八－三七八八
国居利男　八八－三四八二
日置清子　八八－三六三六
日置貞子　八八－三一二〇
斉藤武生　八八－三九二二
滝日一正　八八－三〇六四

■栗　巣

島崎増造（監事）　八八－二二三六

増田洋子　八八－四〇四一
筧　政之助（理事）　八八－四〇三一
中山周左ェ門　八八－二七二八
野田恵光　八八－四〇二七

■古　道

細川　優（理事）　八八－二八六一
清水克巳　八八－二八六二
歳藤堅雄　八八－三九七九

■名皿部

有代眞一（副会長）　八八－三七九一
有代紀子　八八－三七九一
有代和夫　八八－二二〇一
森下正則　八八－三四一三
佐尾チドリ（理事）　八八－三五四四

■島

森藤雅毅（理事）　八八－二六八四
山田長次　八八－三六四八
森　数雄　八八－二五五四
田中　篤　八八－二七九二
奥田昌明　八八－二五二〇
直井篤美　八八－二六二二
雉野尚子（理事）　八八－三五六四
遠藤利雄　八八－三五二六
石井敏子　八八－二五〇二
本川喜代士（理事）　八八－三八三三
本川清子　八八－三八三三

平成17年度　決算書

（収入の部）　△印は予算額に対しての増加額（単位：円）

項目	決算額	摘要
前年度繰越金	70,766	
会費	1,936,000	
会員会費	250,000	正会員115名 家族会員20名
特別会費	1,678,000	1日研修6,500×42名=286,000 1泊研修29,000×48名=1,392,000
役員研修費	8,000	
助成金	90,000	
寄付金	26,000	
合計	2,122,766	

（支出の部）　（単位：円）

項目	決算額	摘要
会議費	53,350	
総会費	11,550	講師料　他
会議費	41,800	年末役員会、会計監査他
事業費	1,960,628	
特別研修費	1,678,000	日帰り研修42名、1泊研修48名
会報発行費	40,950	400部
事業活動費	9,760	郡上郡内文化財めぐり 奉仕作業、七日祭り
文化財展示館パンフ	95,550	2,000部
1日・宿泊研修補助	136,368	1日研修、宿泊研修
事務局費	25,385	
消耗品費	19,000	接写用無反射ガラス
通信費	6,385	
会費（県・市）	83,000	県:63,000 郡:20,000
合計	2,122,363	

収入 2,122,766 － 支出 2,122,363 ＝ 403円

（403円は次年度へ繰り越し）

平成18年度　予算（案）

（収入の部）　△印は予算額に対しての増加額（単位：円）

項目	予算額	摘要
前年度繰越金	403	
会費	603,000	
会員会費	263,000	正会員2,000円×123名 家族会員1,000円×17名
特別会費	320,000	日帰り研修40名×8,000円
役員研修費	20,000	役員研修会費20名×1,000円
助成金	81,000	郡上市より
寄付金	10,000	
雑収入	0	
合計	694,403	

（支出の部）　（単位：円）

項目	予算額	摘要
会議費	50,000	
総会費	10,000	
会議費	40,000	
事業費	570,000	
特別研修費	390,000	1日研修・役員研修
会報発行費	90,000	400部
事業活動費	90,000	市内文化財めぐり、奉仕作業等
事務局費	18,000	
消耗品費	10,000	
通信費	8,000	
旅費	0	
会費（県・市）	50,000	県:30,000　郡上市:20,000
予備費	6,403	
合計	694,403	

平成17年度の歳入・歳出経理について監査を行った結果、適正に処理されていました。

平成18年5月13日

監事　田口勇次　島崎増造

●編集後記●

今年に入り、あれだけ身近にいたスズメの姿も鳴き声も聞かない。家庭菜園に蒔いた種をねらう野鳩の姿もめっきり少ない。そういえば、田植えあとの上空を飛翔するツバメをほとんど見かけない。自然界に微妙な変化が進行しているのかと、農業を趣味とする私は不安感が増すばかりである。アメリカの女性生物学者レイチェル・カーソンは一九六二（昭和三七年）出版の『沈黙の春』で、殺虫剤のDDTや農薬の大量使用の結果、春が来ても小鳥のさえずりなどが聞こえない自然のあり方を『沈黙の春』と表現した。そして、このような世界を『病める世界』とも警告した。

昔から私たちは自然の息吹を微妙に感じ取り、共生しながら生きてきた。

昔しからの生活の営みの痕跡が文化や文化財であるが、郷土の文化や文化財に少しでも関心を持つということは、実は自然との微妙な対話を通して、私たちのあり方を考える第一歩になるのではと思う。『沈黙の春』にしてはならないのです。

（眞）

「文化財やまと」第三一号　平成十八年六月一日発行　発行者／大和町文化財保護協会　代表者／佐藤光一　印刷者／白鳥印刷